



お客さま、こんにちは！ 「人を笑顔にする技術」の新洋技研工業です。
人を笑顔にする技術って？抽象的過ぎてわからん！と思われたかもしれないですね。これは弊社が40年の節目を迎えるにあたり、あらためて自社の存在意義とは何かということを考えていた時に浮かんだ言葉でした。

自分たちの製品や設備を導入いただいたお客様先から、より良い環境づくりや商品づくりが行えたよ、と喜んで頂けたときの笑顔、その環境で働く社員さんたちが、より仕事がしやすくなったと喜んで頂いた時の笑顔、そして、そこで造り出された商品を、様々なシーンで手にした人々が、おしい！嬉しい！嬉しい！と笑顔になって明日への活力となること、また自社の社員が仕事を通じて自己の持つ可能性を伸ばす喜びが持てるような会社であること、これが存在意義ではなからうかとの結論に至り、それを一言で表す言葉が「人を笑顔にする技術」でした。更に、50年、60年、その先の100年へと継続させていくにあたり、この言葉が当てはまり、自社の持つ技術が活かせる分野であれば、果敢にチャレンジしていくことができるだろうと思ったのです。

ということ、これからも笑顔の増殖を目指し(?!?) 精進してまいります！

こんな時だからこそ「笑顔」を！

笑うということは自律神経系の緊張を緩め、免疫力を高めるとも言われており、数々の実証がされていますよね。全世界を巻き込み、経済活動に大きな支障をきたしている新型コロナウイルスについては様々なことが言われており、私たちは何が本当のことなのか、よくわからぬ状況となっています。そして心ないデマによつて不安をあおり、トイレットペーパーやティッシュペーパーの買い込みなどが起きています。とても悲しい状況だと思えます。そんなときの人々の顔からは笑顔が消え、免疫力を下げ、益々ウイルスの思うつぼにはめられることになってしまっているのではないのでしょうか？ 例年であれば、インフルエンザが流行し、多くの方が感染しているはずが、全く話題に上がらない。なぜでしょうか？ 予防接種があるから、タミフルなどの薬があるから大丈夫？ それでも毎年多くの方が亡くなる事実は何？ 毎日ウイルス関連の話題にばかり関心を向け、事実だけでなく何らかの意図を感じる批評を交えた報道は、余計に人々の不安を煽るだけではないかと思えます。報道の自由をはき違えているのではないのでしょうか？

新型コロナウイルスに限らずウイルス感染予防を怠らないことは必須ですが、こんな時だからこそ自己免疫力を高めるためにも人々が笑顔になれる話題をたくさん提供し、経済活動を活性化させるためにマスクは一役買って頂きたいものだと切に願います。そして、情報の取捨選択をして、楽しく過ごすことが出来るようにして行かなければならないと思います。それには美味しいお酒とおつまみなどは最適な演出家、是非飲んで食べて、笑ってこの状況を乗り切りましょう！ (と自分にも言い聞かせております) 宜しくお願い致します！

日本の野鳥シリーズ



ヒガラも頑張る

佐藤 弘

メジロ1羽を入れた鳥籠を持って調査地に来た中年男性が、弱っていたので保護してしばらく飼ったが、野に帰す前にここの足環を着けて欲しいと言う。そのまま信じてよさそうだがお断りした。ここでの捕獲と放鳥が決まりで持込み持出しはできず、まして飼育下にあった鳥に足環は着けられない。全国共通の調査原則は変えられないと返したら、そんな杓子定規なことをと少し不満な様子だった。善意の行いとはいえ、捕獲に当時は環境大臣許可が飼育には知事許可が必要なのに、違反しているというダメ押しはしなかった。

私達は山階鳥類研究所認定のバンダー資格取得を目指す人や調査参加希望者に門戸を開き、種の識別や性別年齢の判定基準ほか、計測と足環装着の手法などを手ほどきする。小学生も高学年ともなればのみ込みが速く、実物を手に専門用語を理解し鳥の扱いもたちまち習得するから、参加ひと月後にはかなりのレベルになる。目をキラキラ輝かせて取り組む、獣医師志望で五年生のY君もその一人だった。

「このヒガラ変です、次列がない」と彼が言う。それを受け取って翼を開くと、次列風切の長さがほぼ半分に切断されている。スズメ目の翼は先端から数えた10枚を主に推進力を生む初列風切と言い、体側に近く揚力を生じる働きの9枚を次列風切と呼ぶ(体側寄りのNo7~9を三列風切と呼ぶ事も、その機能はいずれ私見を述べたい)。その次列を切り詰めれば空中に浮かぶことが困難だ。ただの密猟者ではなく専門知識を持つ者の仕業だ。だがその目論見は外れ、籠抜けしたヒガラはあつぱれ自由の身になり調査地に飛んできた。あとは毎年羽が生え変わる換羽が無事に終わる事を待つだけだ。

そのろくでもない人物は翼面積と重量の比を他と比較し飛行性能を示す、翼面荷重という考え方を知らないようだ。軽量でそれなりの翼面積を持ち身軽に動く本種と、放し飼いのフラミンゴを同列に考えている。これをなんとかの浅知恵と言うのではなかったか。

かつてハトがトリ・インフルに感染した情報もたらされた事があった。環境省と山階鳥研が直ちに動き、私達も検体用のキジバト捕獲で協力したが、幸い国内での感染例は無かったらしい。しかし今は未知の新型コロナウイルスによる死者がでる状況だ。「我々の周囲の文明というものがだんだん心細く頼れないものに思われてきた、なんだか炬燵を抱いて氷の上に座っているような心持ちがする」と、100年も前に喝破した寺田虎彦の言葉が今さらながら身に染みる。

さて、本種はあまり人を恐れない。男性登山者の毛髪を巣材用に引き抜こうとするヒガラの写真を見た事がある。天辺が涼しいお方はその節は充分にお気を付けを。

お知らせ 好評いただいております。日本の野鳥シリーズ冊子が完成いたしました。ご連絡いただければ、次号に同封いたします。

■【癒しのいぬ】

生産部工務課長 小澤 春樹

私の癒しは、嫁とせがれではなく家族の一員の犬のさくらです。さくらはもうすぐ10歳になるメスのミニチュアピンシャー（ミニピン）です。出会いは嫁さんとペットショップ巡りをしていて、店頭に並ぶ前の子犬を見させてもらった時でした。3か月になったばかりのさくらを触ろうとしたら、私の手を舐めてきたのです。それが気に入ってしまい、嫁さんを説得し家族に迎え入れることになったのです。

2年前、首の骨が潰れてくる病気（人間だとヘルニアに近い症状）になり、手術が難しく、また手術したとしても完治するのは難しいと言われました。この病気になってから心配になり、私だけ夜一緒に寝るようになりました。リビングの畳スペースに毛布を敷き、雑魚寝状態で2年近くさくらと寝ています。夏冬関係なしに掛け布団の中に入って来ます。それがすごく可愛くて私の癒しになっています。家に帰れば吠えて出迎えてくれますし、座っていると膝の上に来て伏せをしていい子にしています。あと何年一緒にいれるかわかりませんがこの時間が私の癒しです。

■【趣味のバイク】

私の時間 ペンリレー



生産部工務 桑原 克晴

趣味でバイクに乗っています。

何台か持っていますが、メインのバイクについて書いてみようと思います。

イタリアのバイクです。自分で買った3台目のバイクです。遅くはないけれど速いバイクでもありません、所詮空冷の2気筒なので出力が限られています。でも、乗るととても楽しいバイクで、さらにデザインが綺麗、その他色々な所が素敵です。

このバイク、そもそも雑誌の写真で最初に見たときは、気にはなるけど欲しいとは思いませんでした。この時は違うバイクに乗っていて、エンジンは同じだったので乗り味的に気になっていました。がわざわざ買おうとは思っていませんでした。

ところが展示会で実物を見たら、雑誌の写真では伝わらないカッコよさに惹かれ跨ったのが運の尽き、跨って一瞬にしてコレだ、と感じました。

それから1年くらい経っても跨った時の感触が忘れられず、ついに購入してしまいました。

あれから15年、バイクの増車はしましたが、このバイクを乗り換えても良いくらいの欲しいバイクは今のところ出てきていないです。今後も大事に乗って行ければと思います。

エッセイ

昔の映画も面白い

生産部 島貫 修一

映画館に行かなくなって10年以上になる。それ以前は金曜夜のレイトショーで主にハリウッドの作品を見ていたが、SFXとかVFXとかCGで作られた映像に飽きてしまった。そんな時にテレビのBSで「駅馬車」が放映された。81年前の1939年の映画だ。

映像は白黒でCGもワイヤーワークも無い時代だから、アクションシーンは人と馬ができる範囲内だけ。でもそれで十分。やり過ぎと言うか現実離れした映像表現に惑わされずに、俳優の演技と物語に集中できる。物語は駅馬車の御者・保安官と乗客7人が時には対立しながらも、保安官を中心にして危機を乗り越えて行く展開で、それぞれが抱える過去や家族・仕事・人生の悩みに、北部と南部の葛藤までもが明らかになる。特に面白いのがウィットに富んだ会話で、皮肉を込めた言い方もあれば、深刻な状況や堅苦しい場面にも、ユーモアのある表現が随所に出て来る。

主役はジョン・ウェインが演じたリンゴ・キッド。しかし最も印象に残ったのはトーマス・ミッチェルが演じたドクター・ブーン。大酒飲みだが医者としての腕は確か。シェイクスピア劇のような大げさな言い回しを好むが、度胸がありルーク・プライマー（悪役）の脅しにも怯まない。ドクター・ブーンという配役が無かったら、つまらない作品になったかもしれない。やっぱり「駅馬車」は西部劇映画の傑作だなと実感させられた。ただし翻訳に疑問を感じるシーンが一つあった。

それはアパッチの女性を見た酒の行商人が「サベージ」（savage：野蛮人とか未開人）と叫んだシーンで、日本語字幕には「先住民」と出ていた。放送局も人権や差別に配慮しているのだろうが、savageを先住民と訳すのは無理がある。1939年の映画なのだからそのまま訳してもいいと思う。

◆ちょっと豆知識◆その43 「コロナ騒動に思う」

技術営業部 取締役部長 成田 護 (mamoru@shinyo.co.jp)

この原稿を書いている3月上旬現在も、テレビでは「〇〇で新たに感染者が確認された」旨の情報が報道されています。

当該地域の「住民の感染に対する感度を上げる」ことには寄与するのでしょうけど、社会的な意味合いは既にほとんどない情報だと個人的には思っています。

親戚が「コロナウイルスには白湯飲むと効くらしい。30℃くらいになるとウイルス死ぬってテレビかなにかでやってた」と言っていたので、やんわりと、しかし毅然として「まったく根拠ない話だから信用するな」と伝えました。

「ウイルスが付着した人体は通常 36℃くらいだ。外気と接触する口や鼻の粘膜はそれより低いかも知れないが30℃を下回ることはないだろう。30℃でウイルスが死滅するならそもそも人体で増殖しないはずだが世界中で感染は拡大している、これはどう説明する？」という内容を「やんわりと」伝えるわけです。

「白湯がウイルスに効く」は論理的に破綻しています。それでもメディアを介して伝わる内容は、ある意味権威付けされて「正しい情報」として独り歩きを始めます。

本稿を読んでいる方の多くは理科系の学校を卒業されたか、あるいは酒造りという「理科系の仕事」に従事されているものと思いますので、世間一般の平均値よりは「高いサイエンスリテラシー」をお持ちのはず。

「未知のウイルス」ということで、ベストアンサーは誰も持ち合わせていません。

こんな時こそ、冷静に、科学的に判断し、「よりベターな」判断を積み上げていくことが必要でしょう。

また、これが本稿で申し述べたいことですが、周りに誤った情報をばらまく「インフルエンサー」がもし居たとしたら、傍観するのではなく、それをただしていくことが「ちょっとサイエンスリテラシーが高い」我々が社会に向けてできることであると思います。

経済への影響も深刻です。

事態の一日も早い収束を心から願っています。



“ちょっと一息”

“想い出”

No.32

基幹事業サポート 山本知男

昨年末は現場も重なって忙しくしている時期に、私事では葬儀が2つ重なり、あたふたした日々を送っていました。葬儀の方は1つは地元なので、ほとんど通常通りに行われましたが、もう1つはちょっと変わった形式になりました。遠方で亡くなったのですが、お墓はこちらの地元にあるので、遠方ではお経が上げられないとの事。それで音楽葬となりました。さてどうなるのかなと思っていたら、“千の風になって”が会場に流れ、それがハーブの演奏で、もの悲しく短調で始まり、最後はオーケストラで重厚に締める感じで、故人を思って聞いているうちにいつも見せていた穏やか笑顔が浮かんできて、何だか泣けてきました。これもなかなか心に残るなと感じた次第です。

話は変わりますが、先日私の所属しているバンドに老人ホームから慰問演奏の依頼があり30分ほど演奏して来ました。

ご老人相手だからあまり大きな音を出したり、激しいテンポ曲では合わないだろうと選曲に苦労しながらも5~6曲程選びました。その中に“千の風になって”も入れてみましたが、バンド内では「曲のなかに“お墓”なんて出て来るから、そりゃマズイでしょ。」等いろいろな意見が出て、では施設の人に問い合わせしてみようとなり、聞いてみたら「全然問題ない」との返事。「皆さんカラオケで唄ってますよ。」との事。じゃやってみようって事で、でも編曲は長調でやってみたら、この曲がもの凄く受けて、おじいちゃん、おばあちゃんが感激して「アンコール！」って叫んでくれました。

“千の風になって”は緩やかなテンポで思い出に浸るには丁度良い曲想かと思います。

良い曲はどんな時でも、どんな所でも感動を与えるものだなと感じた瞬間でした。

